

夏の 小品 三篇

かしおり



午前十時前だというのに日差しはすでに本格的だった。小さな川の土手には木陰さえない。由香はつばの広い麦藁帽子を深くかぶり、草むらにしゃがんだ。空を遮った低い視野の中で、ゆるやかに流れていく緑の川面も、その流れに葉先を浸し揺れる岸辺の熊笹も、ひからびた苔や泥で縞模様をつけた平たい石も、圧倒的な光を受けて白々と輝いている。

水路をつなぐコンクリート製の水門の上に男は立っていた。

まっすぐ垂れた釣り糸は、水門の影の黒い水面に歪んだ楕円を作る。釣竿を握るやせた男の腕を見る。帽子の庇に遮られて顔は見えない。魚釣りにまつわる子どもの頃の平凡な思い出話を、男は繰り返し話していた。歌うようなその声に、無邪気な自尊心と自分への甘えが交じったかすかな傲慢さを感じる。由香は夜明け前の情事を思い出し、目を閉じる。

初めての二人だけの休日だった。たぶん男は妻に、さりげなく、そして周到に組み立てた嘘をついたのだろう。自分のために苦心したであろう男のことを思うとより愛しさが募ってくる。見知った人間のいない遠い土地でゆっくりと過ごせる十分な時間、その計画に由香は心はずませ、期待した。もしかしたらそれをきっかけとしてより深い、新しい関係へと転じていくかもしれない、と思った。もしかしたら大きな人生の転機となるかもしれない、とも思った。由香ははしゃいだ。男もはしゃいでいた。軽やかな笑い声をたて、意味のない冗談や親密な沈黙を交わし、そして対流する潮のようからだを絡ませ抱き合った。

「アメリカザリガニって今でもいるのかな」

男が言った。川のその波音は軽やかで美しく、男の声と交じり合い流れる。

一瞬、風が立ち、笹の群れがふくれあがる。

由香は帽子を押さえた。肩に塗った日焼け止めの匂いと腐った植物の匂いが鼻につく。

――ぜったいに許せない！

唐突に思い出した。悲鳴にも似た母の怒号。あまりにも唐突だった。男の昔話につられたのかもしれない。

「魚釣れないね」

突然思い出された幼い日の一場面を掻き消すように由香は言った。

「少しくるのが遅かったかもね」

男は言う。

せっかく手に入れた、光にあふれた、男とのかけがえのない時間を台無しにしたくない。由香は男に微笑みかけた。自分の声も、男の声も、ひどく遠くから聞こえてくるような気がする。うまく笑えているだろうか。

「夕方、涼しくなってから出直そうか」

男はそう言って糸を引き上げた。麦藁のふちから微笑みかけてくる男の白い歯が見えた。由香はこれから夕方まで過ごすであろう薄暗いホテルの部屋を思う。あの夏の日、父と母が向かい合っていたあの部屋と同じ、青い翳を湛えた部屋。

父と母のいさかいから逃れるように外に出た由香は、家の前の用水路で水遊びをしている従兄弟たちに混じって裸足になった。無心で水に足を浸した。田んぼをつなぐその水は澄んで、ひんやりと冷たく、ふくらはぎまでのたっぷりとした量を軽快に流した。ひとり家から出てきた父は、水路の前にしゃがみこんだ。由香は父を見ることができなかった。代わりに従兄弟たちが「あのねえあのねえ、ザリガニがいるよ」と勢い込んで報告した。そのときの父がどんな表情をしていたのか、由香には分からない。ずっと背を向けていた。笑っていたとしても、悲しそうにしていたとしても、どちらの顔も見たくなかった。しばらくして父はあきらめたように立ち上がり「じゃあね由香」と言って去っていった。由香は自分の足にまわりつき流れていく透明な水をずっと見つめていた。

父とはそれ以来会っていない。

両親はほどなく離婚し、母に引き取られた由香は数年後新しい父親を持つことになった。義父は実の父親のように由香を大切に思い、かわいがってくれた。義父を本当の父親だと思うようになった。実父の顔は思い出せない。

――ぜったいに許せない！

この小旅行を知った男の妻は、そう叫ぶのだろうか。

風が立つ。さっきよりも強く、手を伸ばす間もなく麦藁帽子を空に飛ばした。視界が一気に広がり、正面からふわりと髪がかき上げられる。男の顔が見えた。

別れよう。

決心してしまうと、それはもうずっと前からそうすべきことだったと思えた。その確信の強さにあきらめのような、絶望のような、深い安堵を覚える。由香は立ち上がった。ガードレールが白く反射する。

少年時代

十一歳の夏。その日、夏祭りだったことをすっかり忘れ、いつものように僕はひとり、近所の川原へザリガニ採りに出かけた。

通り雨がいった。

川岸の木陰に駆け込む。さっきまで強い日の光をきらきらと反射させていた川面は、打ちつける雨粒に波立った。乾いた土埃が湿っていく。木の葉が揺れる。ほてった肌が冷まされた。

雨はすぐにやんだ。雨雲は山の向こうに流れていき、頭上には再び青空が切り開かれて、蝉たちがまたけたたましく鳴き始める。草むらから降ったばかりの雨粒が一斉に蒸発していく。ビーチサンダルの足で蹴飛ばすと、細かな水滴が弾けて飛んだ。つま先が濡れる。すぐに乾く。

虹が出ていると教えようと思って、僕は土手の上に乗って捨てた自転車に飛び乗った。サドルは濡れていた。立ちこぎで土手を走り、舗装された村道を走り、家に向かう坂道を駆け上る。

庭先に自転車を投げ出して、縁側に駆け寄り、家の中に向かって叫ぼうとして、息を呑んだ。

座敷の奥の深い影に、赤やピンク色の菖蒲が浮かんでいた。

由梨姉（ゆりねえ）だった。

十七歳の由梨姉がまっすぐに立っていた。藍色の地に菖蒲模様の浴衣。母が後に膝をついて帯を直している。再婚相手の連れ子である由梨姉と母はまるで本当の母娘のようだった。

縁側に身を乗りあげている僕に気づき、母は帯に手を当てたままこちらを見る。

由梨姉もまたこちらを見た。

外の光に眩しそうに目を細め、気恥ずかしそうに微笑んだ。後にまとめた長い髪が両耳の前にだけ垂れていて、その間でふっくらとした唇が艶やかに色づいていた。

蝉が、喧しく、鳴いた。

僕は縁側に座る自分の足を見ていた。膝頭は傷だらけで爪は泥で黒く縁取られている。甲やくるぶしや脛に乾いた泥が白くこびりついていた。

座った僕の横に由梨姉の白い素足のつま先が並んだ。桜貝のような十粒の大小の爪。そっと盗み見る。石鹸の甘い香りがした。何も言えず、顔も上げられず、僕はただ日に晒される汚い自分の両足を見つめていた。虹はもう消えてしまっただろうか。

「ケンちゃん」

由梨姉が隣に座りこむ。僕はほんの少し尻を遠ざける。

「綺麗でしょ」

袖を掲げ、僕の顔を覗き込むようにして言った。僕は日の照りつける庭の地面を見たまま、

「しらね」

と答えた。

「何よそれ。かわいいでしょうよ、浴衣」

由梨姉が頬を膨らます。

「ブス」

思わずそう言った。そして自分のその言葉に調子づく。「ブスブスブスブス。ブスは何着ても

一緒だよーだ」

縁側から飛び降りて、庭の真ん中からおどけた顔で由梨姉に舌を突き出す。

「お母さぁん、ケンがひどいこと言う！」

由梨姉が奥の母に向かって言いつける。僕は母の小言から逃げるために、また自転車に飛び乗って走り出した。

ただ、虹と一緒に見たかっただけだ。一緒に見て、「綺麗だね」と言いたかっただけだ。

日が暮れて、由梨はひとつ年上の男子生徒と夏祭りに出かけていった。僕は祭りには行かなかった。ただ遠くの祭り囃子をひとり聞いた。祭りに浮かれたバイクの集団に巻き込まれて由梨姉が死んだという一報を受けたのは、留守番の僕だった。

年月が過ぎ、由梨姉の歳を越え、学校を卒業して、就職し、職場で知り合った女と結婚をした。ふたりの娘を授かった。それなりに幸福な日々を送っている。下の娘は今年、由梨姉の享年と同じ歳になる。

そんな今でも、ときどき、由梨姉と一緒にあの虹を見たかった、と無性に思う。

眠っているあなたが、丸めたその背をもぞもぞ動かす。あなたを包みこんだ柔らかく湿った土の、小さな塊がひとつふたつ崩れ、くだける。しばらく蠢いてその小さな体よりちょっとだけ大きく広がった穴の中で、あなたは伸び、そして縮む。

鎌状のするどい前足で目の前の土をつつく。崩れる。崩れた土の上に載り、つぶし、またはだかる土をつつき崩す。あなたは感じる。この向こうに土の湿り気をちゅうちゅう吸ってそれを地上高くから降りてくる太陽の匂いのする甘い液とだくだくと入れ替えている太い管のありかを。その波打つ脈を感じている。もちろん、あなたは地上をまだ知らない。太陽、を知らない。でも、それが甘く、あたたかく、希望に満ちたなにかすばらしいものだというを知っている。ただ知っている。だから惹かれる。感じる震動をめざし、あなたはふたつの鎌を振り上げる。突き進む。

ぶつかる。

慣れ親しんだ土のようにつついてもほぐれない固い無骨な木の根。どくんどくんとはっきり感じる。一心に目指したもの。欲望が満ちる。衝動が突き上げる。口吻を突き刺す。あなたのなかにまだ見ぬ太陽の熱い希望が吸い込まれていく。満たされる。

あなたは思う。たぶん、いつかここじゃないどこかへ自分に行くのだ。そこはきっと、この甘い匂いに満ちたすばらしい場所なのだ、と。

たとえあなたの頭上の地面が分厚いコンクリートで塗り固められたとしても、あなたは目指す。その縁を探す。裂け目を探す。絶望を知らずただ探し、季節を逃し、死ぬだろう。それでもあなたは太陽の夢で身をいっぱい満たしている。

幸運があなたを味方して、地上に出ることができるかもしれない。しかしすぐに烏や鼠に食べられてしまうかもしれない。それでもあなたは生まれて初めてのまばゆい太陽の光を浴び、匂いを吸い、風を感じながら満たされたまま死んでいくだろう。

地上に出て、敵にも襲われず、存分に明るい空気を味わったあなたはどこかの枝にしがみつきじっと待つ。何が始まるのかあなたは知らない。でも、待つ。待たねばならないと強く思う。やがて背が割れ、薄羽が現れる。しかしまだあなたは何が起きたか分からない。くすぐったい背中をふるふると動かすとふいに世界が広がる。身が軽い。あこがれ続けたなにものかの、その正体を真正面に発見する。ああ、そうだ、自分が求め続けていたのはこれだった、とそこで初めてすべてを知るだろう。そして数日を生き、死ぬだろう。

しかし。

あなたはまだ何も知らない。

知らなくていい。

ただ今を感じ、衝動に従い、満たされ、生き、そして死んでいきなさい。それまでまだしばらく、ここでお眠り。